

〈紹介〉

溝口 貞彦 著

『和漢詩歌源流考』

——詩歌の起源をたずねて——

小川 晴 久

本書は五章からなっている（第一章「君が代」考、第二章「君が代」九州王朝讚歌説批判、第三章阿倍仲麻呂の歌―古田武彦説批判―、第四章和歌の発生について、第五章漢詩・五言詩の発生について）。第一章と第四章を中心に紹介する。

第一章の「君が代」考は、「さざれ石の巖となりて」という歌詞を分析し、「君が代」が挽歌であることを明らかにする。

その論証は大変緻密である。まず巖は万葉集においては墓地（墓所）をさして使われていること、さざれ石は靈石であることを明らかにする（「ささ」は神と関連することば）。次に「苔の生すまで」の「苔生す」とは死者の再生を意味するという。

よって「さざれ石の巖となりて、苔の生すまで」は死と再生を意味しており、「君が代」は、現世における長寿を願う賀歌ではなく、死後の来世における永世を祈る挽歌であると結論づけられる。

そして「君が代」の元歌（「我君は 千世に八千世に さざれ石の巖となりて 苔のむすまで」（古今集卷七））の本歌として想定されている歌（「妹が名は 千代に流れむ 姫嶋の 子松が末に 蘿生

すまでに」（万葉集卷二））が挽歌であったことを以て駄目押しされ、「祝賀の儀式で一斉に挽歌を歌う国民は、祝宴の会場で弔辞を読む客と同じく、悲喜劇といわなければならぬ」と結論される。

溝口先生の投じた一石はげに巨大である。

氏が考証の中で「さざれ石」が「巖」となるのは、小石成、長論ではなく、集積（堆積）の思想であって、中国の老子の思想と仏教思想に典拠を求めておられるが、首肯できることである。ただ『中庸』の書にも集積の思想があることを指摘しておきたい（「地は一撮土の多」、「山は一卷石の多」、「水は一勺の多」）。老子、孟子、『中庸』は親近性が強い。

次に和歌（五七調）の発生についての考察である。

従来一般に、記紀に多く残されている不定型の古代歌謡が、しだいに形を整え、定型の長歌、和歌が形成されたとみられていたが、「記紀の長歌は決して民謡から自然に発達したのでも、また實際民間で歌はれたのでも無く、支那文学の知識のあるものが机の上で案出したものである」という津田左右吉の主張（『文学に現はれたる国民思想の研究』第一巻、一九五一年）がなされ、これが大きな影響を与えて、国文学界において広く受け入れられ、今日までそれに反論を加えた人はいないという。氏は言う。

「津田のいわば爆撃に対し、国文学の側からそれに真正面から立ち向った人はまだいない。和歌成立論は、爆撃され、荒廃した状況のままとなっているのである。本論は、そのような状況の中で、和歌成立論の再構をめざすものである。」

氏は二つの道を設定する。一つは音数の変化を追い、五音、七音

の成立をたどる。今一つは、和歌發生のルートを、片歌↓旋頭歌↓和歌と、片歌↓古代歌謡↓定型歌（長歌・短歌）の二つ想定し、具體的作品で立証している。

第一の作業は、五七五七七の構成単位をなす、五音、七音の成立を説明したもので、ここから入るのも論理的であるが、立証自体も論理的である。

まず、古代歌謡が初期から中期、後期へと進むにつれ、一句当りの音数が増加していくことにふれ、漢字の伝来の影響と虚詞の発達をあげる。伝統的な和語が漢字の助けを借りて意味が分化していく（例、のる―告る、宣る、詔る。たはく―婚く、淫く（姦淫する）、戯く（戯むれる））。熟語の増大は言うまでもない。虚詞は書き言葉（文章）の発達とともに、また仮名の発明と共にふえていく。これらを前提にして、五音は、「漢字二字の熟語+助詞」が、七音は「漢字三字+助詞」がそれぞれ基本枠わくとなって成立したことを、枕詞、慣用句を多数あげながら跡付けていく。五音の成立よりは七音の成立の方が説明は難しい。そこを氏は三字の熟語の最初は神名であったことに着眼し（二字の漢字名に神や姫や彦、命を付して。例、塩しお椎ちのち神かみ、豊玉姫、海幸彦、月読つきよみ命）、次に三字熟語には、名詞だけでなく、動詞、動詞+名詞、名詞+動詞の例も挙げながら、（恋このはす無な之なし、人莫ひとな通かよ、不見みえ恋こひ、忘わす年とし、勿なほ、念おもひ、不な得か、君きみ將まさ留とど、霧きり立たち渡わたなど）、七音の成立を追っていく。五音、七音の成立のあとは、二句の決まり文句、三句の決まり文句の考察である。これらの慣用句は枕詞から始まる場合が多いと言う。

以上は五七五七七の単位とその結合の成立の考察である。

もう一つの不定型詩から定型詩への考察では、古代歌謡「久米歌」の分析に特別力が込められている。津田左右吉説を覆す作業となるので尚更である。久米歌を石母田正説に依拠して五世紀の族長歌（戦闘歌）とし、古い時代の歌であるとした上で（井上光貞等の説を否定）、久米歌の音数律を独自に分析し、短句と長句の組合せによる音の上下運動と最後を七七で終る収束（終息）の形をそこから発見する。著者渾身の考察である。

五七調の形成に漢詩の影響があったことは従来言われているが、それは七世紀後半以後のことであるので、和歌の成立に作用したのではなく、万葉の五七調の確立に寄与したことを氏は強調する。『懐風藻』に収められた日本人の漢詩五言詩が、中国の五言詩と同様に、上の二言と下の三言に分かれる二・三のリズムであり、（二言が五音、三言が七音に相当）、五七調を促進し、確立したと根拠を明確に指摘して。

紙幅の関係で「漢詩・五言詩の発生について」を紹介できないのは残念である。こちらも緻密で説得力がある。本書はとてもスケールの大きな本である。

（八千代出版 二〇〇四年三月）